

有機農業③—〈事例〉ミゲル氏の農場

ハバナ市街地から車で15分ほどの都市近郊農業で、3haほどの農場を2人で有機により栽培している。長年有機栽培に取り組んでおり、いろいろの農家に有機栽培のノウハウを指導している。ミゲル氏は独立自営農家で、ここで農家の子どもとして生まれたそうだ。いつから何故有機農業に取り組むようになったかは、残念ながら確認することはできなかった。

牛を使って耕耘しており、牛のふんを積み上げたところでミミズを養殖している。そのミミズは畑に放して土づくりさせ、さまざまな野菜とともに果実を栽培している。

野菜栽培の基本には混作と自家採種を置いており、ちょうど筆者等が訪れた時には、ラディッシュ、ブロッコリー、ハウレンソウ、ニンジン、パクチー、レタスが栽培されており、種はそれぞれの種を混合したものをまくという。果樹はタマリンド、ココナツ、マンゴー等が栽培されていた。ヤシの木もあったが、その下では豚が飼われ、また小さな池ではナマズが養殖されていた。まさにナマズも含めた有畜複合経営、多品種少量生産による循環型の農業が展開されていた。



野菜の生育は概ね順調であったが、同じ畑地の中でも場所によって生育にばらつきがあり、種まきの時期をずらしたためというよりは、土壌条件が均一化されておらず、場所によって土壌条件のばらつきが大きいように感じられた。もともとは湿地であったところを干しあげて畑地にしたものか、場所によっては大きな穴があって水たまりになっていたり、畑は起伏も多く必ずしも均平にはなっていない。農地面積の割には、有効活用されている部分が半分程度で、生産性は高くはないように見受けられた。

ここで生産された野菜や果実は、主に生協に出荷しているが、この生協はエンジニアをはじめとするいろいろの人たちによって作られたもので、ここに出荷している農家はミゲル氏だけだという。生協に加えて学校給食に出しているとともに、一般にも販売しているそうだ。これらの販売価格は国が決めたものが適用されているという。

観光農業—〈事例〉ラウル農場

キューバに足を運んでみてイメージと異なっていた一つは、キューバとは言っても一律ではなく地域性・多様性に富んでいることであった。キューバの西半分を走り回っただけにすぎないが、ハバナを出てはじめに向かったサパタ半島は湿原が多く、サパタ湿原国立公園がある。またハバナの西に半日かけて出かけた世界遺産にもなっているピニャーレス溪谷は石灰岩の山々が雨で削り取られて中国の桂林のような景観を呈している。車で走り

ながら沿道に展開する農地も、草がまばらに生えた牛や羊等の放牧地が多かったものの、サトウキビやキャッサバ、タバコ等が栽培されているところもあれば、水田もときどき見かけることができた。

こうした多様な自然環境とすぐれた景観を生かして観光農業を展開していたのがピニャーレス溪谷にあったラウル農場である。ラウル農場のような観光農業はおそらくは先駆的なものであって一般的ではないと思われるが、今後、こうした観光農業が広まっていくことになるのであろう。



ラウル農場は生産形態としては独立自営農民に該当するが、使用人も使って（少なくとも4人以上）展開している。農場のちょっと先には切り立った岩山が続いており、その岩山の奇景をバックにして、この地域はタバコの産地であることからタバコを中心に広がる畑と、点在する民家がマッチングして素晴らしい景観を形作っている。農場の中心には、数十人が飲食・休憩できる屋根と柱だけで壁がなく、どこからでも自由に出入りできるレストラン兼休憩所が設けられており、ここで食事やジュースやビール、モヒートをはじめとするカクテル等のアルコールも出される。

農場は13haほどで、タバコの生産を中心としたゾーンと野菜を生産するゾーンとに分かれる。栽培した葉タバコは合掌造りのような形をした昔ながらの乾燥小屋で乾燥させたうえで葉巻が作られるが、この一連の工程の作業を見学することができるとともに、乾燥した葉タバコを自分で巻いて葉巻を作る体験もできる。また野菜はもっぱらここで出される食事の食材用に生産されている。この野菜とともにタバコも自然環境を守っていくために有機栽培で生産されているとともに、畑の耕耘には専ら牛が利用されており、昔ながらの牛耕が行われている。自然環境とともに伝統的な農法と生活のたたずまいを大事にすることによって、都会の住人はもとより世界から観光客を呼び寄せている。具体的には、休憩所で一緒になった若者2人はベルギーから、また後に述べる馬に乗って周遊する途中の休憩場所で会った子ども連れの夫婦はスイスからであった。また岩山のあちこちでは、たくさんの人たちがロッククライミングをしており、これも海外から人を引きつけているとのことだ。

このラウル農場も含めて、観光農業の一番の目玉になっているのが馬に乗っての周遊だ。よく訓練された馬で、初心者でも手綱さばきを教えてもらってすぐに一人で馬に乗る。もちろん数人に一人、ベテランのカウボーイがついてチェックしてくれ、危険はない。畑の側の道を片道30分ほど、往復で1時間。途中、上から谷間に広がる田園風景を一望できるところで30分ほど休憩する（写真）。筆者が馬に乗るのは内モンゴル以来で二度目であるが、馬に乗っての散策とやさしく吹き抜ける風、そして葉タバコやキャッサバ等が生産

されている素晴らしい田園風景に、実に快適であるという以上に、至福の時を過ごすことができた。馬に乗っての田園の中の散策は、癒しや健康、そして観光や地域おこしとしてもきわめて大きなポテンシャルを持っているように感じた。

馬の散策・ツアーはラウル農場だけでなく、この地域が一体となつての連携なしには成り立たない。田園風景を一望できるところからだけでもグループは5、6組のグループが馬で散策しているのが見えることから、おそらく同時には10組前後のグループが散策しているものと推測され、1グループ5人として、50頭前後の馬が仕事をしている勘定になる。馬の調教をはじめに、たくさんの観光客に対応しての馬の手配と付き添い、また馬に乗るところまでの馬車による観光客の送迎等と、全体のシステムがしっかりしているからこそ成り立つものである。地域の人たちの現金収入確保の貴重な場となっているが、地域の人たちの連携する力と、馬を使っての観光農業で地域振興をはかろうとする熱い思いがこの馬のツアーに凝縮されているように思う。

なお、この地域での有機農業への取組についても触れておけば、ラウル農場の隣の農場では化学肥料を使用しており有機栽培はしていないそうだ。この地域が98年に国立公園に指定されたことから、国が自然環境を守るいっかんとして有機栽培推進のプロジェクトを展開する中で、5、6カ所あるモデル農場の一つとしてラウル農場は有機栽培に取り組み始めたようだ。しょっちゅう市の指導員がきてチェックし、アドバイスしてくれることから、有機栽培することでの問題はないという。農場で作業しているアントニオ氏(78歳)の話では、たい肥作りとともにできるだけ自家採種に努めており、また混作しながらの輪作体系をしっかりと組んでいるとのことで、有機栽培は手間はかかるが、それなりの収量を確保できるだけでなく、安心を与えてくれる。もっと有機栽培は広がったほうがいい、と語る。

協同組合

キューバの農業の担い手・生産形態は国営農場から非国営部門へとシフトしてきたが、このところ独立自営農民が増加しているとはいえ、その多くは協同組合生産基礎単位(UBPC)、農業生産協同組合(CPA)、信用サービス協同組合(CCS)の協同組合が占めている。

今回のキューバ訪問では残念ながら協同組合の現場に足を運ぶことができなかった。協同組合とその生産実態についての見学・ヒアリングは、次の訪問時の課題として取っておきたい。

とりあえずは独立自営農民であるミゲル氏の「キューバ農業では生産にしても販売にしても協同組合と無関係でいることはあり得ない」との話を掲げておくと、あわせて UBPC は国営農場を分割・再編したものであって農民の自発的意思によって設けられたものではないこと、また社会主義国であることから UBPC は勿論、他の協同組合組織も含めて国家のコントロール下に置かれていることなど、協同組合のあり方や国家との関係など、基本的な課題を有していることはここで指摘しておきたい。また規模の大きな組織ほど生産性

が低いのが実情であり、協同組合と規模の問題もこれに絡んでくる。さらにキューバは革命政権を樹立して以降、医療費とともに教育の無償化を実現・徹底させると同時に、その質の向上に努めてきており、国際機関の分析では今や世界の学力ランキングの1番はキューバだとされる。こうした長年にわたる教育の積重ねが知的人材の育成・蓄積を可能にしてきた。こうした知的人材を生かしていくことは最重要の国家的課題であり、その活躍の場を提供していくにふさわしい協同組合のあり方が本質的に問われているように思う。

ところで2011年4月に社会経済体制の抜本的転換を目指す「革命と党の社会経済政策基本方針」が出され、新たな体制のための法整備は2014年末までにほぼ終了し、15年からは本格的な実施段階に入っている。「全人民の所有制」と名付けられた新たな体制は、4部門からなっており、「改革」国有部門、外資部門、中小民間部門そして協同組合部門となっている。既に農業部門での協同組合化は進められてきており、これにより新たに非農業部門での導入が意図されている。協同組合は3人以上集まれば作ることができ、2015年6月時点では419の協同組合が立ち上げられている。「そのほぼ半分が食品の加工や販売であり、そのほか衣類の縫製、バス輸送、会計士、コンピューター技術者など、職種は多彩である。といってもまだ始まったばかりであり、国も、協同組合員も、手探り状態にある」（後藤247頁）と報告されている。

そもそもホセ・マルティの社会理念は「すべての人々の幸せ、しかし、最も虐げられた人々の解放優先」「助け合いの社会」を目指すものであり、キューバが目指してきた社会主義は協同組合との親和性が強く、農業以外の部門での協同組合活動が活発化していくことが期待される。

番外編①—二重通貨

ロシアに行った時に、両替して持参したルーブルで支払おうと思ったら、ルーブルよりドルのほうが信用が高いことから、ドルで払ってもらったほうがありがたい、と言われて“えっ”と驚いた記憶がある。

今回のキューバではCUCなるキューバ・ペソに両替していたが、市場に出かけた際、そこで売られているヤシの実の中にある水を飲むために、ナタで上を部分を切ってもらい、CUCで払おうとしたら、同じキューバ・ペソでも国民が使うCUPの価格でしか表示がない。そこで同行のサイネ女史がCUPで払ってくれて、ヤシの水にありついたことがあった。すなわち国民が使っているのはCUPであり、日本円等で両替した時に保有することのできるキューバ・ペソCUCは、CUPとしては使用することはできない。国民が使っている通貨と外国人が使う通貨は別々の、いわゆる二重通貨制となっている。

現在のレート換算は1CUC=25CUPとなっているが、市場でもCUPしか使えないところと、CUCでの支払いを前提した市場とに分かれ、それぞれが棲み分けしており、最近では両方が使える市場が少しずつ出てきているという。そして概してCUPしか使えない国民向けの市場は、販売されている商品の種類が限られているのに対して、CUCの市場は商

品の種類が豊富で、輸入品が多くなっている。

キューバの公務員の平均給料は650CUP（2006年で390CUP）程度であり、これをCUCに換算すると26CUCとなる。1CUCは113.69円（2017年5月10日時点）であることから、公務員の平均給料は円では3000円ぐらいとなる。こうしたCUPで給料をもらっている人たちがほとんどを占める中、クラシックカーに乗せるタクシーや外国人を対象にした民泊施設も増えている。筆者たちが試しに民泊しているところからハバナの中心街までクラシックカーのタクシーに乗って約15分ほど走ったが、その料金は20CUCだというのを値切って15CUC。1日、仮に5回客を乗せたとして、1日の水揚げは75CUCで、これは1,875CUPとなり、1日で公務員の給料の3倍を稼いでいることになる。キューバ滞在期間中、アメリカの国交回復もあって観光ブームでホテルはどこも満杯ということで、全行程を民泊したが、泊り+朝食で40CUCといったところ。

乗りはしなかったが、メキシコ・キューバ経由でローマ法王に謁見を果たした伊達藩の支倉常長の銅像が立つ公園の近くで休憩していたクラシックカーのタクシー運転手に聞いてみたところ、このクラシックカーは約300万円で購入し修理したものとかで、親がタバコ生産で儲けた金に、アメリカにいる親戚が送ってくれた金をあわせて購入したそうだ。ちなみに冗談半分で300万円以上のトヨタの新車とこのクラシックカーとを交換しよう、と持ち掛けたら、トヨタの車では観光客相手の商売にはなりにくいのであろうか、クラシックカーのほうがいいということできっぱりと断られてしまった。またハバナで2泊した民泊施設の女オーナーのご主人はスイス人ということで、ご主人の金が施設投資に大分回ることによって、民泊を始めたものと推察される。

自営業を起業し外貨を稼ぐ人が増えてきているが、これにともなって所得格差が広がりつつある。社会主義国であり、まだ配給制度も続けている国で、所得格差を抑制し、全体の所得向上を図っていくこと、さらにはいずれ二重通貨制を廃止していくことは大変な重要課題ではあるが、非常な困難をとまなうことが容易に想像される。と同時に、かなりの長い時間をかけていくことが必要であるが、それまで海外も含めた経済環境が待ってくれるか、正直なところ不安を感じないわけにはいかない。

番外編②ー「自然と人間のための財団」と中南米文化圏

ラザロ氏の学生時代からの友人であるロベルト氏が都市農業の現場を紹介してくれるかもしれないということで、ロベルト氏が所属している「自然と人間のための財団 la Fundacion de Antonio Nunez Jimenez por Naturaleza y Hobbre」に足を運んでみた。

この財団は、5つのテーマに取り組んでいるが、そのうちの4つは環境保全に関するもので、あとの一つが農業であり、パーマカルチャーに重点を置いてノウハウや資金の提供、広報につとめている。財団として遺伝子組換え作物や農薬・化学肥料の使用には反対しているという。

ここで紹介しておきたいのは、この財団の創設者であるアントニオ・ニュニエス・ヒメ

ネスなる人物と、彼が実証につとめたキューバ文化の源流としての中南米文化圏についてである。

ヒメネスは地理学者であるが、キューバ民俗学の創始者でもある。カストロとともに革命戦争を闘い、カストロとは仲良しでもあり、学者ながらペルー大使もつとめている。

そのヒメネスは1987年、64歳の時に、アマゾン川の源流であるエクアドルからキューバまでをカヌーに乗って旅しており、この旅を1年かけて成功させている。キューバの文化はアマゾンに源があり、これを実証するために、各分野の各国の学者・研究者総勢300人を参加させての大きな旅でもあった。出発地点でカヌーを作り、そのカヌーでアマゾンを下りながら調査を重ねるとともに、生活用具をはじめとする膨大な量の民具の蒐集を行ったが、これが当財団の建物に陳列されている。エクアドルからネグル川を下り、ペルーに入ってナボ川へ、さらにブラジルに入ってアマゾン川を下り、途中から北上し、コロンビアからオリノコ川を下ってベネズエラに出、今度は海を漕ぎ渡ってプエルトリコ、ドミニカ、ハイチを経由してキューバに到着するもので、2万kmに及ぶ。ヒメネスの、手づくりしたカヌーに乗って、時間をかけ、あくまで昔ながらの旅である。関野吉晴のいう“グレートジャーニー”によつての実証的な調査手法には共感するところ大である。

キューバの原住民のほとんどはスペインの植民地時代に亡くなっており、原住民が築き上げてきた文化がいかなるものか筆者の知るところではないが、陳列された国別に置かれた民具等を見る限りでは、アマゾンの上流からキューバに至るまでかなりの類似性・共通性があることは間違いない。この類似性・共通性は、アメリカやメキシコにはないものであり、キューバは距離の近いアメリカやメキシコではなく、中米、南米と色濃い関係を持つてきたという話には興味をひかれる。

現代的にはアメリカを中心とする北米が圧倒的な影響力を有しているが、時代をさかのぼればむしろ北米の影響力は限定的で、中南米文化圏が大きな力を持っていたということに、新鮮な驚きのようなものを感じる。時代とともに力学は変化するものであり、現状の力学がいつまでも続くとは限らない。アメリカの栄光も未来永劫続くわけではないことを、示唆してもいるように思われてならない。

総括と提言

キューバの農業について語ることは容易ではない。その農業構造はスペイン、アメリカ、そしてソ連との関係によつて規定されたものであり、ひたすら輸出するための産業としての農業でしかなく、本来の食料を生産するための農業であることが許されずにきた。農地は輸出用の砂糖の生産に特化し、食料の大半は輸入によつて調達しもっぱら海外に依存するという構造を実に長い間にわたつて余儀なくされてきた。大国の分業経済の中に常に縛りつけられ続け、ソ連・東欧社会主義圏の解体という歴史的な“激震”を被ることによつてやっと解放されたとはいうものの、食料を含む重要物資の多くを海外に全面的に依存する構造に置かれながら、いきなりハンゴを外されて自力再生するしかない“地獄”としか

いいようのない状況に放りこまれたわけで、ここから都市農業や有機農業をテコにして食いつなぎながら這い上がってきたのがキューバの歴史であり、農業であるといえる。今回のキューバ訪問ではキューバ農業を垣間見たにとどまり、その実情の一部を理解できたに過ぎないが、終わりに感想を中心に若干の総括を試み、あわせて提言を付しておくこととしたい。

第一に実感させられたことは、アメリカの本音がいかなるものかについてである。日本は太平洋戦争で敗北し、アメリカに従属することによって今日に至っている。国民の大半はアメリカへの従属は当然のこととして受け止めており、それが軍事的・経済的にも日本にとって最善の選択であるというのが常識と化している。これに対してキューバは、アメリカの実質植民地から革命戦争によって独立を勝ち取るとともに、独立を保ち続けてきた。革命政権が社会主義国家を標榜したことが大きいとはいえ、革命政権確立後、アメリカはブラヤ・ヒロン侵攻事件を発生させただけでなく、常に軍事侵攻の機会をうかがい、同時に経済封鎖を継続・強化する等、革命政権の転覆を執拗に試み続けてきた。

ここには強大な軍事力と経済力とを背景にした、露骨なアメリカ本位主義を見て取ることができる。アメリカに素直に従属している日本からは見えにくいのは確かであるが、アメリカに対抗し続けてきたキューバだからこそ、その歴史はむき出しにされたアメリカの本音がいかなるものかを雄弁に物語っているといえる。アメリカが主導しようとした TPP にしても、これから離脱して推進しようとしている日米 FTA にしても、“アメリカン・ファースト” に象徴されるようにアメリカがどれだけの利益を獲得できるのかだけが問題であり、相互の経済発展などというのは相手をおびきだすためのエサであり、“幻想”を振りまいているだけにすぎない。キューバの歴史を知るとは、もう一つのアメリカ、アメリカの本音を知ることができる。

第二に、国家のあり方について考えるにあたってキューバは実に大きな示唆を与えてくれている。キューバは社会主義を宣言してきたが、カストロは共産主義者ではなく、自らの理想を実現していくための器として社会主義を選択したと見ることができる。

カストロが求めたものはホセ・マルティが掲げた「人間は自由な存在である」ことが可能な国づくりであり、公正な社会の追求、無償の国際協力、助け合いの社会の建設等であり、あくまでその手段としての社会主義国家であった。社会主義というイデオロギーにとらわれることなく、ソ連型の社会主義のあり方に危険を感じ取り、ソ連解体前からあらたな社会主義国家のあり方を模索し続けていたことが、経済危機を乗り越え、国をあげて現実的で弾力的な対応を可能にしてきた基本的な要因となったように思う。

革命政権発足以降、配給制度による国民への食料安定供給の導入とともに、無償での教育と医療に力を注いできた。今では世界で最も高い教育水準を実現するとともに、知的人材の豊富な蓄積がなされ、また医師の派遣等をつうじて先進的医療技術を中南米に供給することによって中南米のリーダーとしての役割をしっかりと果たしてきている。知的人材、知的資産による国づくりと国際貢献。資源に乏しい日本が目指すべき途をキューバは既に

歩き続け、その成果を着実に発揮しつつある。

第三が、ソ連の解体と経済危機における海外に食料供給料を依存することの脆さと食料安全保障の重要性についてである。国際分業は順調な時にはそれなりのメリットをもたらすことは確かであるが、一定程度以上の食料を確保し食料の自給に努めていくことは国が存続していくための第一要件であり、食料自給率が40%にも満たない日本こそがこれを前提にした農業のあり方を基本に置いての農政展開が求められる。大規模経営、単一作物生産による生産性向上も必要ではあるが、あくまで地域自給、国内自給を基本に家族経営による多品種少量生産が持続してこそその話である。家族経営による多品種少量生産と大規模経営による少品種大量生産を組み合わせるの地域農業の振興が求められる。

第四に経済危機以降、自給的経済へのシフトを目指して、帰農者による新規就農を増加させるとともに、小農経営のウェイトを高めようとしている。(ただし、「農業生産に対する国家コントロールの確保という観点から市場原理の導入は限られ、・・・私有農も革命以来はじめてその役割が積極的に評価されたとはいえ、依然として小規模経営に限られ、副次的役割にとどめられている」(後藤2(16頁)))日本では小規模・零細農家を切り捨て、特定の農家に農地を集積しての大規模経営を目指しており、両国はちょうど反対のベクトルにある。キューバにとって日本の小規模・零細な家族経営が持つ技術力と経験は大きな力になるとともに、日本にとってもキューバの大国による支配から脱皮し経済危機を乗り越える中で小農が果たすべき役割の重要性を明確にしてきた経験と理念には学ぶところが多い。

第五に、キューバでの経済危機における都市農業や有機農業の振興が、農業の持つもう一つの世界の重要性とともにこれが成り立つ可能性を明らかにしてくれたように考える。確かに現状では、市街地で農地を見かけることは稀であり、多くの畑は転用されて建物等に姿を変えてしまっているが、いざとなれば自ら生産し自給していくしかない。余儀なくされて取り組んだものであったとしても、国民皆農により都市農業で多くを自給するとともに、生産資材が枯渇する中で有機農業がこれを可能にした。まさに国をあげての壮大な実験が行われたもので、緊急事態への対処としてモデル化していくことも可能であるが、このためにも平常レベルで都市農業や有機農業を振興し、国民が日常的に農業にいそしんでいくことが大事であることを示唆している。

こうした総括を踏まえてキューバとの交流の強化・拡大について提言をしておきた。第一が、キューバの経験・歴史を学んでいくことである。キューバほどに幾多の緊張と窮乏を乗り越えた経験を持つ国はない。この経験を学ぶとともに、キューバから世界を見ることによってあらたな視点が与えられることは必至であり、今の日本は複眼的視点を持つことがまさに必要な状況にあるように思う。

第二に、キューバでは都市農業による自給をすすめてきた経験は有するが、それまでのキューバ農業は大規模経営による単作農業が基本であり、多くは農業者というよりは農業労働者として農作業に従事してきた。小農の重要性が認識されるようになったのはようやく

く20世紀末になってからのことであり、小農の育成がキューバの大きな課題ともなっている。日本では小規模・零細の家族経営が農政からふり落とされそうになっているが、まだまだ元気な小規模・零細の家族経営の農業者も多い。日本の小農の持つ技術・ノウハウ等をこれからのキューバの農業者の経営・自立に役に立てられることは少なくない。

第三に、キューバ経済の自立をすすめていくと同時に小農経営の自立をはかっていくためには、地産地消を直売によって推進していくことが大きなポイントになってくるものとする。例えばグリーンファームの小林会長は既にグアテマラやベネズエラ等での産直を指導してきた経験を持つが、こうした日本の経験やノウハウ等をキューバにも伝えていくことが必要なのではないかと考える。

第四に、我が国で農協の市場化・自由化を促す、的外れの農協改革や自己改革がすすめられつつある一方、ワーカーズコープ法の制定を求める動きが広がる等、協同組合や協同活動そのもののあり方を本質的に見直す動きも活発化している。特に組合員が働くと同時に、出資もし経営にも当たる協同労働は、これからのあたらしい働き方であるとともに、あたらしい協同組合のあり方を示すものであり、小農の確保や自立的な協同活動を展開していくにあたって大きな示唆を与えるものであると考える。日本とキューバとの間で、協同労働を軸にしながら小農の確保・育成や協同組合の生産性向上等についての研究交流をはかっていく意義は大きいのではなかろうか。

そして第五に、こうした日本とキューバとの交流の強化・拡大をとおして、新大陸型の大規模農業ではなく、都市農業や有機農業による小農経営や国民皆農を発展させると同時に、協同労働も含めた協同活動のあり方をモデル化し、各国の自給度向上を応援していくことを提言したい。日本とキューバだからこそ、弱肉強食の農産物の貿易自由化に対抗して、各国が持つ食料主権を尊重し、各国の経済的自立を支援していくことができる。2012年が国連が定める国際協同組合年であるとともに、2014年は国際家族農業年であったように、世界情勢は食料安全保障や飢餓・貧困の撲滅のために家族農業や小規模農業、そして協同組合が大きな役割を果たしていくことを求めている。貴重な歴史と経験を持つ日本とキューバの交流と連携を強化し、食料安全保障の強化をつうじて各国の共生をはかり、世界平和をリードしていくことが期待される。

今後の調査課題

あらためてキューバ調査を行うかどうかは未定であるが、今回調査を踏まえて、あらためて必要と考えられる調査課題を上げておきたい。

- ・小農経営および自給的農業と都市近郊農業の動向と経営実態。特に経済危機にもなつて帰農した人たちの定着状況と、2008年以降の動向（＝新規就農者の動向と実態）
- ・各種協同組合農場の経営実態
- ・直売所、国営市場、自由市場の実態と関係
- ・市街地で行われている農業の実態（屋上農園を含む）

- ・有機農業に関する法制度及び有機認証制度の有無
- ・農業分野にとどまらず協同組合全般の動向と実態

最後になるが、キューバ滞在中、ハバナにある JICA 事務所を訪問し、JICA のキューバをはじめとする中南米での活動について説明を受けるとともに、意見交換をすることができた。突然の訪問依頼にもかかわらず、お忙しいところ時間を割いて貴重なお話をおきかせくださった山口和敏所長、川上哲也氏、山田泰子氏に心よりお礼を申しあげたい。

参考文献・資料（順不同）

- ・（後藤 1）後藤政子『キューバ現代史—革命から対米関係改善まで—』2016年（明石書店）
- ・（後藤 2）後藤政子「90年代キューバにおける農業政策転換の基本理念」『ラテンアメリカ論集32：2—21』1998年
- ・（吉田 1）吉田太郎『200万都市が有機野菜で自給できるわけ—都市農業大国キューバ—レポート—』2002年（築地書館）
- ・（吉田 2）吉田太郎「キューバ—都市農業は生き残れるか—」『田園回帰シリーズ⑧世界の田園回帰』2017年（農山漁村文化協会）
- ・新藤通弘「キューバにおける都市農業・有機農業の歴史的位相」『アジア・アフリカ研究』（384号）2007年
- ・環境コミュニティ研究室（東京農業大学・国際食料情報学部・食料環境経済学科）「中米キューバの都市農業・有機農業を視察する」（？）（？）
- ・環境コミュニティ研究室（東京農業大学・国際食料情報学部・食料環境経済学科）「歴史的移行期にあるキューバ農業の現状—第2次研究室視察報告—」（？）（？）
- ・北中真人「キューバにおける農業—概要と JICA の取り組み—」『国際農林業協力』179号、2015年
- ・伊高浩昭『チェ・ゲバラ—旅、キューバ革命、ボリビア—』2015年（中公新書）
- ・佐々木譲『冒険者カストロ』2005年集英社文庫

キューバ視察旅行2017スケジュール(案) 2017/1/26

【2月27日(月)】

成田15:25 → (AM057便) → メキシコシティ 13:10
メキシコシティ 18:45 → (AM453便) → ハバナ 22:30
ハバナ空港 → (タクシー) → ハバナ中心街

<ハバナ泊

(民泊) >

【2月28日(火)】

午前: フリー(休憩)
午後: Zapata半島(サバタ湿原国立公園)方面へ移動(レンタカー)

<Jagüey Grande泊(ファームで

の民泊) >

【3月1日(水)】

ラザロ氏の故郷(Jagüey Grande)において現地農業を見学・体験する

<Jagüey Grande泊(ファームで

の民泊) >

【3月2日(木)】

午前: ハバナへ移動(レンタカー)
午後: フリー(ハバナ観光)

<ハバナ泊

(民泊) >

【3月3日(金)】

午前: 世界遺産・ピニャレス渓谷へ移動(レンタカー)
午後: ピニャレス渓谷で行われている伝統的な自然保全型農業を見学・体験する
<Viñales泊>

【3月4日(土)】

終日: ピニャレス渓谷で行われている伝統的な自然保全型農業を見学・体験する
<Viñales泊>

【3月5日(日)】

午前: ハバナへ移動(レンタカー)
午後: フリー(ハバナ観光)

<ハバナ泊

(民泊) >

【3月6日(月)】

Nuñez Jimenes Foundation が取り組む都市農業の見学、小林会長の講演
ハバナ市内の高校を見学する

<ハバナ泊

(民泊) >

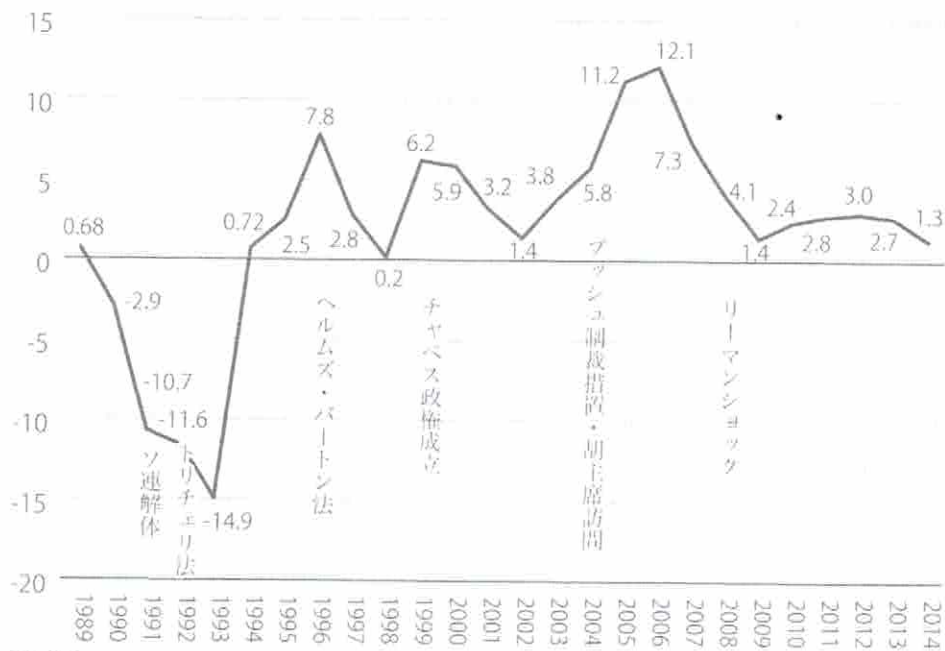
【3月7日(火)】

午前: 空港へ移動(タクシー)
ハバナ 15:10 → (AM452便) → メキシコシティ 17:35

【3月8日(水)】

メキシコシティ 0:30 → (AM058便) → 成田 6:20 (3月9日)

(図) / 国内総生産成長率 1989～2014 (%)



※注)

出典：GDP 数値は 1989～2003 年は Kushnir, Word macroeconomic research, 1970-2014, および 2003～2014 年は Oficina Nacional de Estadísticas, Anuario Estadístico de Cuba 2005 & 2015.

出典：後藤政子『キューバ現代史』222頁

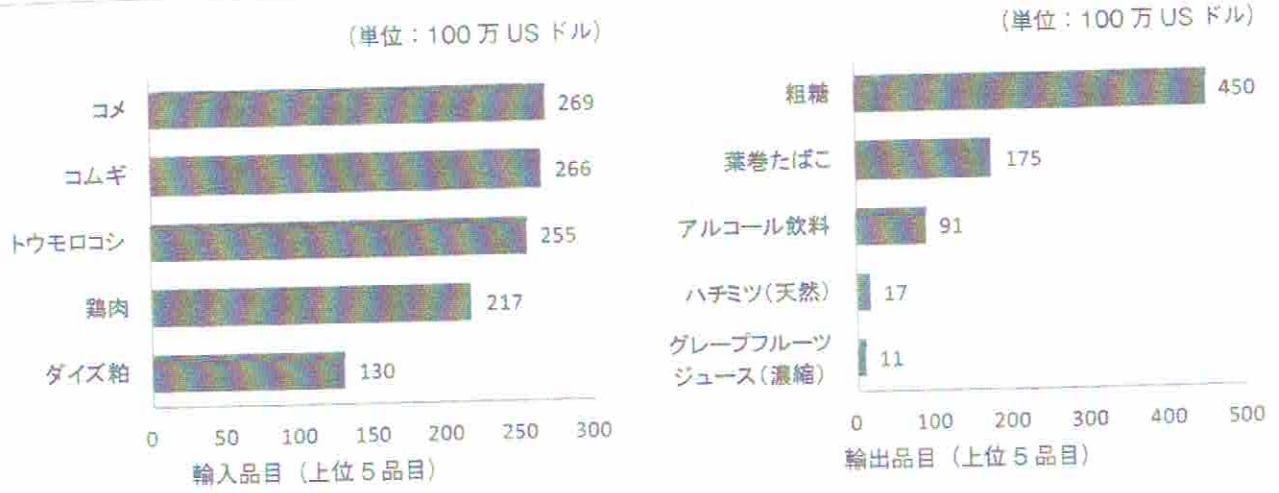
〈表 1〉 1989-2005 年のキューバ農業生産の変遷

項目	1989	1995	2000	2005
GDP (100 万ペソ)	26,652	21,737	28,206	39,172
農牧畜生産 (100 万ペソ)	4,153	1,312	2,017	1,700
GDP における農牧畜生産%	15.6	6.0	7.2	4.3
栽培農地面積 (1,000 ㊦)	4,410.4	4,410.4	3,599.6	3,227.7
農業従事者 (林業・漁業含む千人)	690.3	835.0	1,187.6	956.3
全労働人口中の農業従事者 (%)	19.6	23.3	27.1	20.2
農産物合計 (砂糖含む、%) *	11,075,437	4,042,614	9,461,884	9,646,785
野菜・根菜類生産 (%)	1,291,435	1,426,465	2,963,165	6,228,800
米生産 (%)	536,381	228,846	552,800	367,600
砂糖生産 (%) **	7,579,000	3,360,000	3,640,000	1,160,000
都市農業生産 (%)	40,000	1,680,000	4,110,000
食料輸入額 (1,000 %) ***	925,349	610,890	671,801	1,804,893
輸入総額に占める食料輸入額 (%)	11.4	21.2	14.0	22.6
一日一人当たりカロリー摂取 KC****	2,845	1,993	2,570	3,286
化学除草剤・農薬 (金額 1,000 ペソ)	80,807	64,611	42,520	35,916
除草剤 (%)	17,151	12,987	5,853	4,613
農薬 (%)	9,740	4,124	3,213	2,558
化学肥料 (金額 1,000 ペソ)	157,752	105,993	46,068	41,700
尿素 (%)	351,000	143,000	110,279	33,985
過磷酸石灰 (%)	337,000	75,000	47,059	11,474
硫酸 (%)	272,000	36,000	17,185	8,365

※注)出典：Oficina Nacional de Estadísticas, Anuario Estadístico de Cuba 1989, 1998, 2001,

出典：新藤通弘「キューバにおける都市農業・有機農業の歴史的位相」

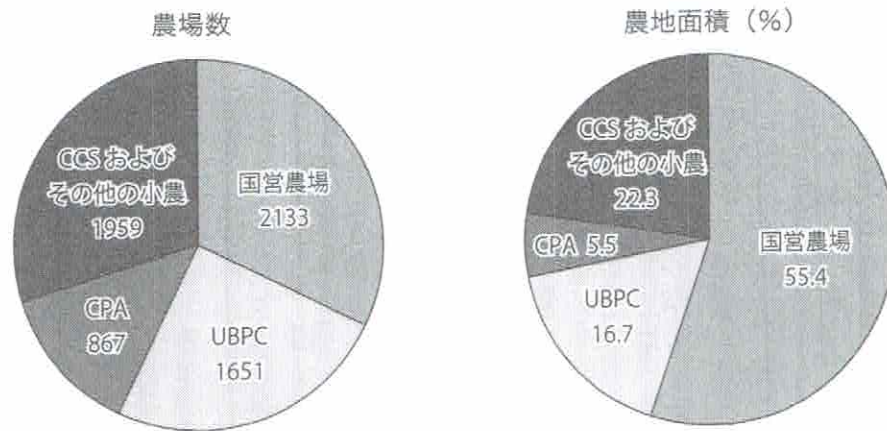
図2 農産物の輸出入品目（2012年）



（原注）出典：FAOSTAT

出典：北中真人「キューバにおける農業」

図3 形態別農場数・農地面積（2015年6月現在）



原注) 出典：Anuario Estadístico de Cuba, 2015 より筆者作成。

出典：後藤政子「キューバ現代史」

(単位：1000ha)

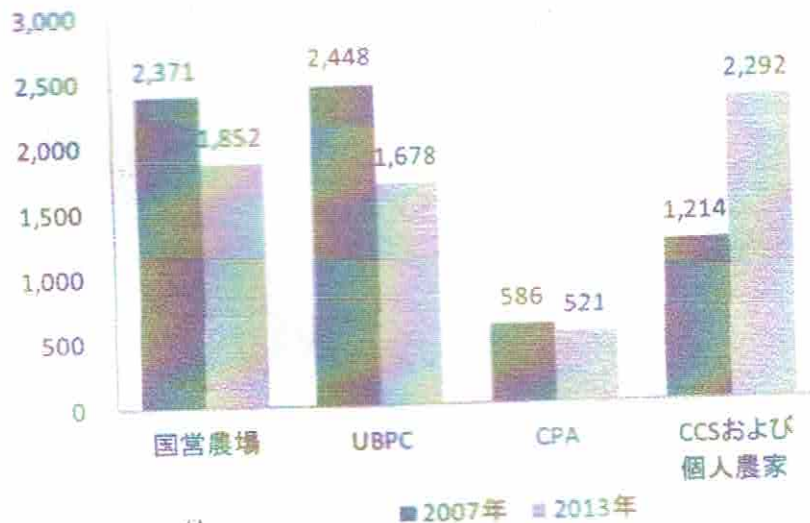


図4 所有形態別農地面積の変遷

原注) 出典：ONE²⁾

出典：北中真人「キューバにおける農業」



採蜜体験でキューバと交流

日本での養蜂は西洋ミツバチが中心である。ところが生産性では劣るものの、低温でも活動性があり、性質もおだやかで、やたらとは刺さない等の特徴を持つ日本ミツバチが再評価されつつある▼こうした折、都市農業や有機農業への取り組みも含めて、持続的で循環型の社会づくりで先行すると喧伝されるキューバに足を運んできた。その実態を探る合間にハリナシミツバチの採蜜を体験した。ハバナから車で東南に三時間。キューバのほぼ中央の南側にあるサパタ湿原国立公園近くの兼業農家であるレオネルさん宅を訪問。自給的農業を営む中で養蜂にも取り組んでおり、地域での普及にも力を入れる▼ハリナシミツバチは文字通り針が退化し、刺されることがない。樹木の洞内に巣をつくるが、切り出した樹木を割ると、たくさんのハチが飛び出し、ハチの巣が現れる。ミツバチの場合、蜜蝋で作られた六角形の巣房に貯蜜されるが、ハリナシミツバチでは、樹脂とハチ自らが分泌する蜜蝋とを混合して作られるプロポリスでできた蜜ポットに貯蜜され、蜜ポットは小さな卵が連なったような形をする▼この蜜はプロポリスでできた蜜ポットで貯蜜される故か、ミツバチ蜜に比べ格段に抗菌性が強く、薬としても多用される。専門家によれば、ハリナシミツバチは熱帯や亜熱帯地域に多く生息するそうで、近いところでは台湾が北限で、日本での飼養はかなわないらしい。まさに熱帯故の特産物。まとまった量での輸入はまだ難しく、当面はキューバを再訪する際の楽しみとするしかないようだ。 (土着菌)

天眼鏡

キューバ農業に光を観る

2月末から3月上旬にかけてキューバに足を運んできた。『200万都市が有機農業で自給できるわけ』『有機農業が国を変えた』等の書籍が出されてもいることから、都市農業や有機農業の大国とされるキューバ農業の実態に触れてみたいとの願望を長年抱いてきた。実際に足を運んでみて、残念ながら首都ハバナの市街地に農地を見かけることはほとんどなく、屋上農園に出会うこともなかった。

ソ連が崩壊した1989年以降、輸入が著しく減少して食料が大幅に不足すると同時に農薬や化学肥料もない中、一時的には街中の空き地を活用し、有機農業の手法を使って無農薬・無化学肥料で自給用の野菜生産に取り組んだことがあったことは確からしい。その後、食料事情が好転するのにもなって、農地は宅地に転用されたり、農地としての利用を取り止めたようだ。実際にハバナ市内や郊外で有機農業に取り組んでいる農家を訪問し、木枠等で囲んで客土し、たい肥と混ぜて高畝で野菜を栽培する「オルガノポニコ」や混植を積極的に活用するなどの現場を見学することはできた。しかしながら「都市農業」の定義がハバナの場合だと、「ハバナ首都圏、及びハバナ県全体」で行われる農業を指すことになっており、かなり広い地域での農業が都市農業とされている。日本での都市農業とは大きく異なり、都市農業に関する統計数値をそのまま受け止めるのは不適當であり、また有機農業についての統計もない。いずれにしても実態は、「都市農業大国」「有機農業大国」には遠く及ばないと言って差し支えなからう。

もう一方でキューバと言えば砂糖、そしてタバコを思い浮かべもする。スペインの植民地時代、アメリカへの隷属時代、さらにはカストロによる革命政権に移行して以降も、著しく砂糖生産に偏重した農業が続い

てきた。すなわら革命後も社会主義圏内での国際分業により、外貨獲得のための最大の輸出品として砂糖が位置づけられ、過半の農地にサトウキビが植えられてきた。輸出ねらいの農業が展開され、食用とする農産物は輸入に依存する偏重した構造が固定化してきた。それがソ連の崩壊にともない食料自給を高める農業構造への転換を余儀なくされ、サトウキビの生産量は大幅に縮小してきた。しかしながら農業の生産性は低く、肝心の食料の自給には程遠いというのが実情である。

こうした中で眼を見張らせられたのが、キューバの西部にあるビニャーレス溪谷での馬を導入し観光と一体化させての農業の展開であった。ビニャーレス溪谷は石灰岩でできた様々な形をした山々が続く奇観を呈しており、国立公園となっているが、そのふもとでは多様な農産物が栽培されるだけでなく、政府のモデル農場として支援も受けて環境にやさしい農法も取り入れられている。これらが自然とよく調和した、素晴らしい景観を形成しており、外国人をはじめとするたくさんの観光客をひきつけている。そしてこれら農園の間を走る道が整備され、馬に乗って散策することができる。その馬が実によく調教されており、はじめに簡単なたずなの操作を教えてもらうだけで乗馬初体験であってもすぐに乗ることができる。勿論、農家の人がいっしょに並走し、状況に応じて馬を誘導してくれるなど、安全性に不安はない。

キューバは観光農業に大きな潜在力を有しているが、日本も同様な能力を秘めているように感じる。これから農業は、景観、地産地消、民泊もキーワードであるとともに、馬・乗馬に大きな役割が期待できそうな気がする。

(農的社会デザイン研究所 鷲谷 栄一)

健康という視点

地域資源の活用による所得の確保・向上にむけての取組みがすすめられているが、そうした中で有用植物等への関心が高まっていく。特に健康ブームに対応して、薬草だけでなく、薬木、キノコ、さらにはハチミツ等への視線は熱くなりつつある。

地域密着型の売り場

筆者は家内の実家が長野県伊那市にあることもあって、よく足を運ぶのが伊那市にある産直市場・グリーンファームである。ここでは野菜、果実、花木等、地元農家が生産・採集した農畜産物やその加工品が並べられているだけでなく、家で使われなくなってしまう白や火鉢等の古道具や農具等も売られている。道路を挟んで売り場の反対側では羊、ヤギ、ダチョウ、ウサギ、アヒル等に加えてイノシシ等も飼われ売られている。ヤギはレンタルもされており、何十頭ものヤギがかわいい鳴き声を発

し、子どもたちがうれしそうにヤギ等と触れ合う光景が展開する。

地域密着型の個性的な直売を展開しているグリーンファームならではのもう一つが、昆虫食と薬草等の販売である。信州独自の昆虫食であるザザムシや蜂の子に、イ

花から集められたハチミツが並べられている。色の薄い物から色の濃い物までバラエティーに富む。

ハチミツパワーを実証

グリーンファームの会長である小林史磨（75歳）さんは、朝一番



**健康とビジネスを導く
地域資源**

農的デザイン研究所代表 苺谷 栄一

ナゴの甘露煮等も並べられている。さらに蜂の子だけでなく、生きたスズメバチ等が入ったハチの巣そのものまでが売られている。またたくさんの薬草に加えて、西洋ミツバチにニホンミツバチのハチミツ、そしてそれぞれに幾種類もの

の仕事がスプーン一杯のハチミツをいただくことだそう。ハチミツはビタミンやミネラルが豊富であるとともに、抗菌力が強く、傷ついた細胞の修復能力に優れている。またハチミツの糖分はブドウ糖や果糖であることから消化器へ

の負担も少ないとされている。

実は小林さんにお供して、この2月末から3月上旬にかけてキューバに出かけてきた。その目的の一つはハリナシミツバチの採蜜現場への訪問であった。キューバ滞在中、あいにくと小林さんは食事が合わなかったらしく、専らハチミツを舐めて、あとは牛乳とバナナをいただくだけ。結果的に一番元気であったのが小林さんで、ハチミツパワーを実感させられた。その小林さんは、カワラダケを煎じたお茶を常飲しており、抗がん効果がきわめて高いという。また糖尿病対策として、ご飯とともに何種類ものキノコを煮たものを一緒に食べているそう。

地域資源がもたらす健康

どうも地域資源の活用が健康の土台ともなるようで、これを楽しみながら自ら実証し、新たなビジネスとすることで地域循環を膨らませている。既に信州大学とこのための研究会をも開始している。